

## 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (3) —結婚、妊娠、出産を通して—

小林 麻子\*・会沢 信彦\*\*

### Mother's Perception of Her Birth Family Using Schematic Projective Techniques (3) — Marriage, Pregnancy, and Birth —

Asako KOBAYASHI, Nobuhiko AIZAWA

#### 1. 問題と目的

子どもを産むと女性は母親と呼ばれ、社会からは母親らしさを求められる。しかし、多くの母親は、母親になることを“非母親”から“母親”へと劇的に変化することとは捉えていない。むしろ、子どもを産むことを出発点として、子どもの発達に並行する形で母親も発達し続ける、漸進的な変化としてとらえている（山口, 1997）。

そこで本研究では、一人の女性が家族体験を通して母親になっていく過程を、図式的投影法を用いて主観的に捉えていくことを試みる。図式的投影法は、行動科学と現象学の統合という観点に立って、体験と意識といった主観的世界を含む人間全体にアプローチしようと水島により考案された、概念領域からイメージ領域を含んだ投影法である（水島, 1979）。家族の中で生まれた母親は両親に育てられ、成長すると親から離れ自分の家族を持つ。やがて妊娠、出産を経て母親になり、子どもを育てる。こうしたライフサイクルの中で母親が感じていることを、図式というイメージを使って語ってもらう。第一報（小林・稲越・会沢, 2009）では、幼少期から青年期の家族関係の変化が図式にどのように表現されているのか分析した。第二報（小林・稲越・会沢, 2010）では、成長にともない変化する家族に対する意識や両親との関係を、駒どうしの距離をもとに分析した。

本稿では、母親の結婚、妊娠、出産を扱う。結婚によって女性は生まれ育った家族を離れ、夫

\* こばやし あさこ 文教大学生生活科学研究所客員研究員

\*\* あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

ともに新しい生活を始める。家族の中での役割は子どもから、妻、嫁に変わる。妊娠は女性に身体的変化だけでなく精神的変化をもたらす（ウィニコット, 1985）。出産は女性が母親として生きていくまきに出発点となる。これらの出来事の中で母親は何を感じているのか、図式から考察する。

## 2. 方法

### (1) 調査協力者

東京の私立保育園の父母会と東京近郊の育児グループに依頼。応じてくれた3歳～5歳の子どもをもつ母親8人を対象とした。

### (2) 調査期間および実施場所

実施期間は2000年9月から11月にかけて。実施場所は調査協力者の都合に合わせたため、調査協力者の自宅、調査者の自宅、本大学院の実習室となった。

### (3) 調査方法

#### ① 家族関係単純図式投影法

直径2cmの円形の駒を家族の人数分用意し、家族の構成員の名前を記入する。B5判の白紙縦に直径10cmの円枠（家族の枠）を作り、家族の駒をそれぞれ自由に移動させながら「ピッタリ」と思える位置に置く。

#### ② カード式自己像単純図式（自己像単純図式に感情カードを併用した複合図式）

B5判の白紙縦に上部が開いた直系10cmの円枠を作り、円枠の上部2cm上に対象カードを置く。直径2cmの円形の駒を自己の核とし、対象に対して「ピッタリ」と思える位置に置く。さらに感情語（Pultchik, R. の感情8語を漢字1文字に置き換えたもの「喜、悲、望、恐、愛、嫌、怒、驚」を用いる）が記された2cm四方の感情カードを、その対象に対して配置する。

表1 質問項目一覧

ステージ	質問項目	ステージ	質問項目
1 子どもから青年期	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもと同じ年頃の家族</li> <li>・10歳頃の家族</li> <li>・18歳頃の家族</li> <li>・18歳頃 母</li> <li>・18歳頃 父</li> <li>・青年期の友人</li> </ul>	4 幼児期 (2歳頃～5歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかなか寝てくれない</li> <li>・ぐずぐずする</li> <li>・飛び跳ねたり叫んだり暴れたり</li> <li>・私の言った通りやってくれない</li> <li>・かんしゃく</li> <li>・おもらし</li> </ul>
2 結婚から出産	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新婚時代</li> <li>・妊娠を知った時</li> <li>・妊娠後期</li> <li>・子どもが産まれた時</li> </ul>	5 第二子以降	<ul style="list-style-type: none"> <li>・第二子以降の妊娠を知った時</li> <li>・第二子以降の出産後</li> </ul>
3 乳児期 (0歳～1歳前後)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて目が合って微笑んだ時</li> <li>・どうしても泣きやまない</li> <li>・私の作った離乳食を食べてくれない</li> <li>・後追い</li> <li>・抱っこ</li> </ul>	6 現在	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夫</li> <li>・子ども(ひとりひとり)</li> <li>・現在の家族</li> <li>・理想の家族</li> </ul>

(4) 手続き

人生のステージごとに質問項目を設定し（表1）、その項目を対象カードとして家族関係単純図式、あるいはカード式自己像単純図式を作成してもらう（図1）。実験者は被験者に「(対象に対して)駒を自由に動かして、自分がピッタリすると思えたら、そこにのりづけして下さい。」と指示する。図式作成後に当時の家族の様子を語ってもらう。質問は幼少期から現在まで時系列に提示する。本稿では、ステージ2 結婚から出産（カード式自己像単純図式、家族関係単純図式）を対象にする。

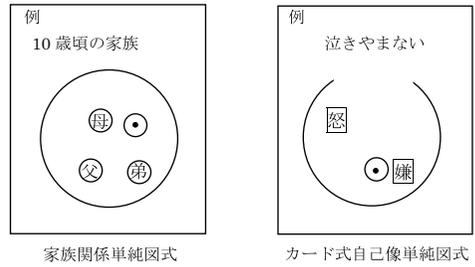


図1 調査で使した図式

3. 結果

調査に協力してくれた母親のプロフィールは表2の通りである。図2-1、2-2は母親が作成した結婚から出産までの4項目、「新婚時代」「妊娠を知った時」「妊娠後期」「子どもが産まれた時」に対するカード式自己像単純図式である。表3は、各項目ごとに感情カードを集計し、それぞれの感情の内容を分類したものである。表4は母親が語った上記4項目の家族関係単純図式の内容を要約したものである。

(1) 新婚時代

表3①より、半数以上の母親が図式に使用したカードは「愛」「喜」「驚」であったが、「恐」「悲」「怒」というネガティブな感情もあった。感情の内容は、それぞれの母親の生活環境が反映されたものとなって多様である。夫との生活が楽しい一方で、生活環境の変化や夫の親との関係が問題になっている。自己の核の位置は、枠（自己の枠）の中心が3人（A, F, G）、対象カードに向かって枠の開かれた部分に置かれているのが3人（B, C, D）であった。

表2 母親のプロフィール

	年齢	原家族	職業 結婚前/現在	現在の家族
A	30代前	父・母・妹(3歳下)	教員	夫・長男(7歳)・長女(5歳) 次男(0歳)・姑
B	30代前	父・母・弟(3歳下)	看護師/教員	夫・長男(4歳)・次男(2歳)
C	30代中	父・母・弟(4歳下)	会社員/なし	夫・長女(3歳)
D	30代中	父・母・妹(双子) 弟(8歳下)	会社員/会社員	夫・長女(4歳)
E	30代前	父・母・妹(3歳下) 弟(8歳下)	会社員/なし	夫・長男(3歳)・長女(3歳) *双子
F	20代後	父・母・長兄(4歳上) 次兄(2歳上)・祖父・祖母	職歴なし	父・母・次兄・長女(3歳)
G	30代後	父・母・弟(3歳下)	会社員	夫・長女(3歳)
H	20代後	父・母・妹(3歳下)	会社員	夫・長女(4歳)・長男(2歳)

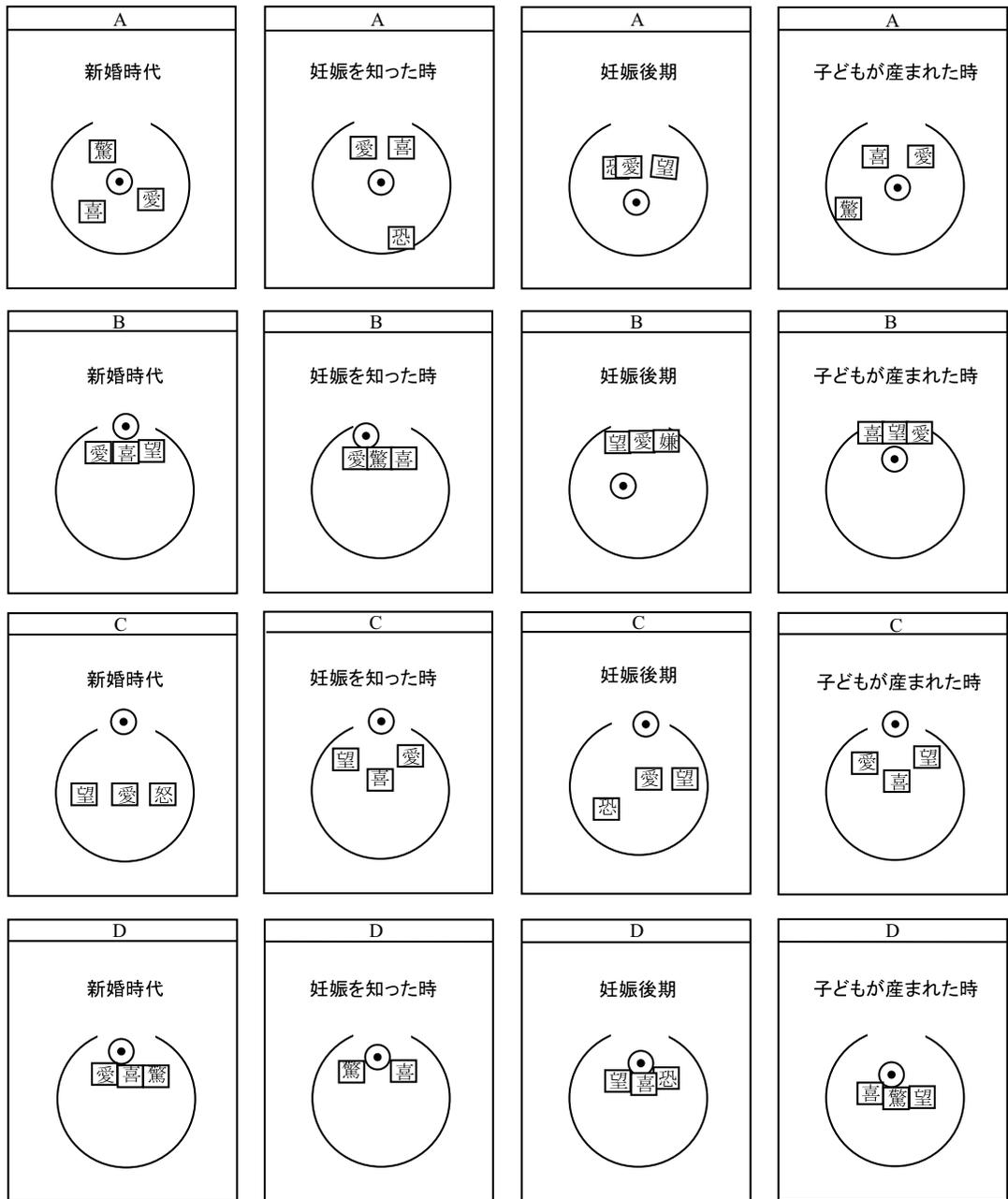


図2-1 母親の作成した結婚、妊娠、出産に対する図式

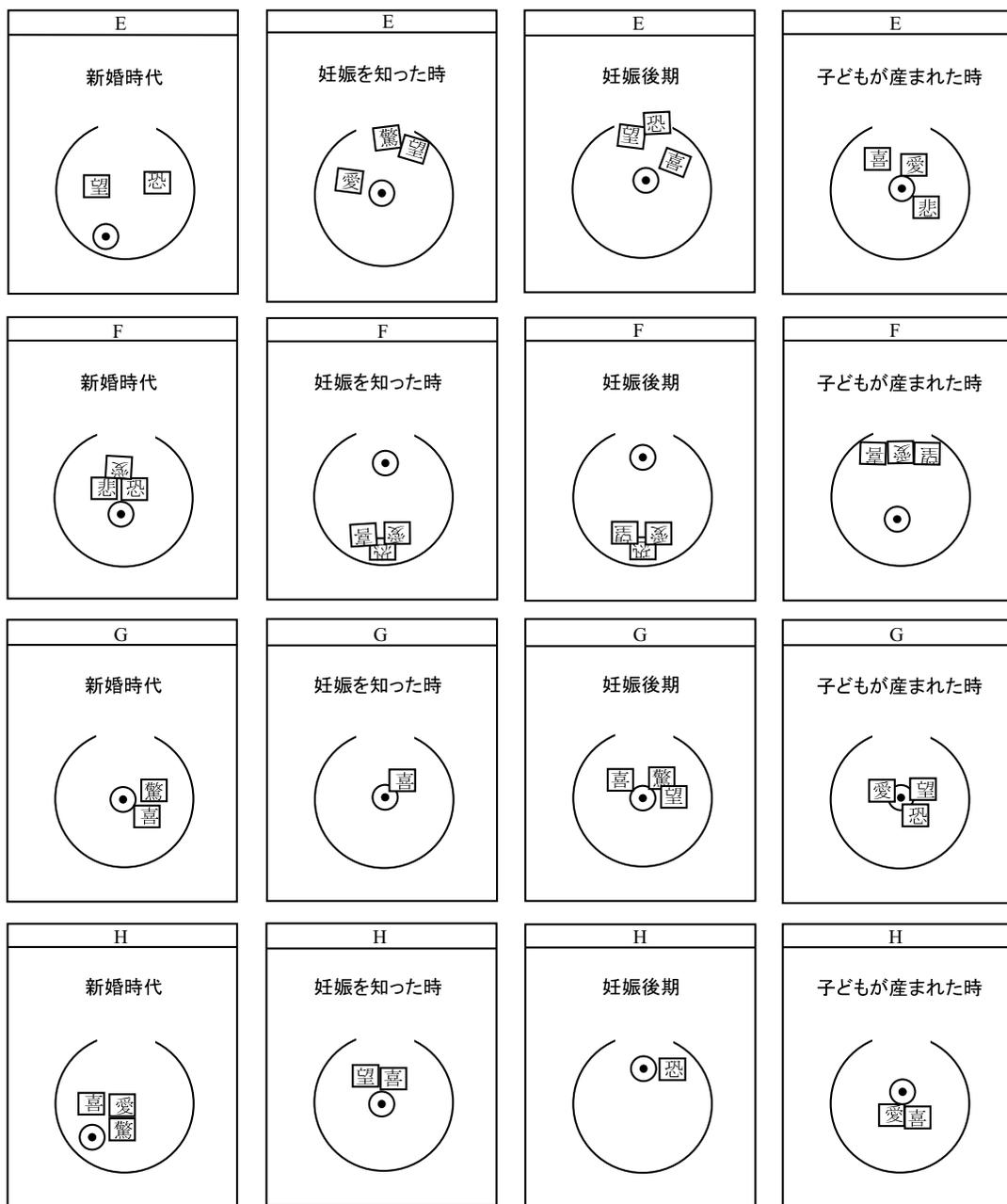


図2-2 母親の作成した結婚、妊娠、出産に対する図式

表3 結婚、妊娠、出産に対する母親の感情（カード式自己像単純図式）

	感情カード	内容
① 新 婚 時 代	愛 (6人)	・夫への愛(B, F)
	喜 (5人)	・自分の家庭を持った(A) ・やっと一緒に住めた(B) ・夫の家族の中に入った(D) ・夫と一緒に楽しい(G) ・親から解放された(H)
	驚 (4人)	・自分が結婚したこと(A) ・夫の両親と同居(D) ・夫の習性を知った(G) ・夫婦以外の問題が起きる(H)
	望 (3人)	・共働きだから家事もよろしく(B) ・新婚生活が楽しい(E) ・仕事が充実(C)
	恐 (2人)	・知らない土地で暮らす不安(E, F)
	悲 (1人)	・家族との別れ(E)
	怒 (1人)	・夫が舅姑に何も言えない(C)
② 妊 娠 を 知 っ た 時	喜 (7人)	・子どもができてうれしい(A, B, C, D, F, G, H)
	愛 (5人)	・夫や子どもへの愛(A, B, C, E, F)
	驚 (3人)	・自分に子どもができた(B, D) ・双子だった(F)
	望 (3人)	・子どもが欲しかった(E) ・元気に産まれて欲しい(C, H)
	恐 (2人)	・無事に出来るのか(F) ・結婚式前だったので親に怒られる(A)
③ 妊 娠 後 期	望 (7人)	・自分にならないで欲しい(A) ・五体満足で産まれてきて欲しい(B, C) ・産まれたら子どもとあれもこれもしたい(D) ・楽しみ(E) ・胎動を感じると希望(F) ・宇宙飛行士になって欲しい(G)
	恐 (6人)	・無事に産まれてくるか不安(C, D, F, H) ・出産や育児が不安(A) ・双子なので出産が怖い(E)
	愛 (4人)	・子どもへの愛(A, B, C, F)
	喜 (3人)	・もうすぐ産まれる(D) ・自分に何かあっても子どもは生きられる(E) ・産休前の準備が終わった(G)
	嫌 (1人)	・気持ちは悪いしお腹は大きくなる(B)
	驚 (1人)	・懐中電灯の光や火花の音に反応する生物的な驚き(G)
④ 子 ど も が 産 ま れ た 時	喜 (7人)	・無事に産まれて良かった(A, F, H) ・産まれた!(B, C, D, E) ・母親になれて良かった(A)
	愛 (7人)	・想像の方がかわいかったけど、親にしかわらないかわいさがある(C) ・かわいくないのに大事に思う生物学的な愛を感じた(G) ・かわいい(A, B, E, F)
	望 (5人)	・家族と仲良くやっいこう(D) ・優しい人になって欲しい(C) ・大きくなって欲しい(G)
	驚 (2人)	・母親になった(A) ・産まれて驚いた(D)
	恐 (1人)	・死んでしまわないか(G)
	悲 (1人)	・産後がきつかった(E)

表4①より、夫婦関係では、夫と対等であると感じているのはB, C, G, 対等ではないと感じているのは、FとHである。AとEは夫が同じ職場の先輩であり年の差もあることから、自ら一歩下がっている。Dは夫の両親と同居しているため、舅姑が加わった関係になる。結婚生活に干渉する舅姑は、CとFである。Cの夫は黙っているのがCが舅姑と関わることになる。Fは夫ともに姑に絶対服従している。

表 4 結婚、妊娠、出産時の母親の家族認識（家族関係単純図式）

	① 新婚時代	② 妊娠を知った時	③ 妊娠後期	④ 子どもが産まれた時
A	仕事の先輩として夫を尊敬。 (せめて夫の下の方に くっついて)	親になるという意味では両親 と対等の感覚になった。	立場は対等だが、夫を頼りにし ている。(夫と自分が重なる) 母が一番気を使わない相手に変 わった。	子どもが中心になった。 父、母として別の面から関わる。 夫の上に私と子どもがいるよう な感じ。(夫と少し離れた)
B	1歳違いなので平等な感覚。	夫とは近くなった。 この時が一番幸せ。	新婚時代に戻ったくらい。 (夫と少し離れる)	みんな近いぞという感じ。 産まれると子ども中心になっ てしまう。
C	舅姑ともめると関わるのは自 分。(私が真ん中、夫は端)	位置は関係ない。単純にみん なで喜んだ。		夫が自分と子どもの横に来るべ きだが、時間的に母が並んだ。 子どもは自分の中心、上に来る ぐらい。
D	夫の両親と同居。自分と夫と、 夫のそばに舅姑がいる。	これでこの家族に入っていけ るかな。(自分と少し離れて 舅姑と夫がまとまっている)	自分と夫は仲良くいて、夫の脇 には姑と舅。あえて私は一緒に いない。	夫と自分は仲良くという訳に は…夫のそばにはいつでも姑 と舅がいる。
E	年上で大卒の夫を尊敬。 (夫が真ん中)	夫「信じられない、うれしい」 実家はみんなで楽しんでいる。 母だけが「小さい体でか わいそうに」と泣く。	自分を中心。夫は離れて暮らす。 母の方が頼れる。入院中の愚痴 を聞いてくれた。	出産一週間後に夫が来た。 大変だったのは感じてくれた。 娘の顔が夫にそっくり。 (夫との距離が近くなる)
F	夫はやさしいが気持ちの通い 合いがない。 姑の言うことは聞けと言う。	つわりで 4~5kg 痩せてしま っても夫は何もしない人。	離れても夫と繋がっていたい。 出産は姑の言いなり。 私は引越しの準備を手伝っ てくれた母の方を向いている。	姑とはいちいちもめた。 夫は何一つ対応できず、悪いの は全て私。(姑と夫がくっつく)
G	職場が離れていたのが2年は 別居。 金銭的に世話になるのは嫌。 (夫と離れている)	夫とは一緒に住んで、ちょこ ちょこ話しをしている。		夫と私と子どもになった。 自分はちょっとずれたがかなり 中心。
H	夫中心の生活、対等じゃない。 自分が我慢しないとこの結婚 はダメになる。(夫の下に自 分がいる)	夫はすごく喜んで、態度が一 変した。 夫と対等になれた気がした。	私の方が優位に立った。 夫は妊娠に無知な分こちらの言 うままに動く。	母に頼ることが多くなった。 舅姑にも説得され、夫は私の実 家近くに引越すことに同意。

## (2) 妊娠を知った時

表3②より、半数以上の母親が使用しているカードは「喜」「愛」であった。ここでの特徴は、母親の認識がほぼ一致している点である。子どもができたことに驚き、喜んでいる。出産の不安を語ったのはFのみであった。自己の核の位置は、枠の中心が4人(A, E, F, G, H)、枠上部の開かれた部分付近が4人(B, C, D, F)であった。

表4②より、妊娠によって夫婦関係が大きく変わったのはHである。Hは妊娠によって夫との関係が対等、あるいは優位になったと感じている。もともと夫と対等であると感じていたB, C, Gは特に変化はなかった。Fは夫が姑の言いなりで、関係は変わらない。新婚時代には夫を尊敬していたAとEは夫との関係が対等であると感じている。また、Aは青年期、両親が恐い、うるさいので排除したいと語っていたが(小林ほか, 2009)、親になるという意味で対等な感覚になったと感じている。

## (3) 妊娠後期

表3③より、半数以上の母親が使用しているカードは「望」「恐」「愛」であった。ここでの特徴は、五体満足で産まれて欲しいという母親の強い願いが「望」と「恐」の双方から語られていることである。

表4③より、出産が近づき、A, E, Fは母を頼りに感じている。

#### (4) 子どもが産まれた時

表3④より、半数以上の母親が使用しているカードは「喜」「愛」「望」であった。ここでの特徴は、無事に産まれた喜びと、産まれた子どもに感じる愛である。

表4③④より、Fは母を頼りにし、出産を機に実家の近くに引っ越すことにした。Dは子どもを産めば夫の家族の中に入れるかもしれないと思っていたが、D対夫舅姑という関係は子どもを産んでも変わらない。Fは支配的な姑に従いきれなくなり夫との関係が悪化する。

### 4. 考察

#### (1) 新婚時代

この時期の感情の特徴は「愛」「喜」「驚」であった。愛は図式に表現されているが、夫への愛を語る母親は少なかった。新しい生活に対する喜び、夫と過ごす楽しさは全ての母親が語った。また、喜びには干渉的な親からの解放も含まれていた(A, B, C, H)(小林ほか, 2010 参照)。一方で、親元から遠く離れて見知らぬ場所で生活を始める悲しみや不安があった(E, F)。夫婦以外の問題では舅姑との関係が大きい(C: 舅姑の干渉に何も言えない夫に怒りをぶつける F: 夫から「姑の言うことを聞け」と言われているので従っている D: 夫の両親と同居するが、舅姑は夫を離そうとしない)。舅姑との関係は、夫婦関係にも影響を与える。

自己の核の位置については、自己の核は円枠の中心にあるものと、円枠上部の開いた部分にあるものがある。前者は安定した、後者は外に向かって積極的な印象を受ける。その一方で、夫婦関係が対等でないFとHの自己の核は円枠の左下に位置している。Fは夫への愛を語っていたが、「愛」も「喜」もなかったのは他の母親と大きく異なる点であった。

#### (2) 妊娠を知った時

この時期の感情の特徴は「喜」と「愛」であった。妊娠できたことへの喜びが中心になっている。妊娠できた喜びには、自分が子どもを持てる喜びと、自分が妊娠できる体であった喜びの双方が含まれている。妊娠できる体であった喜びの背後には、妊娠できる体かどうかの不安がある(F: 子どもが産める体かずっと心配だった)。長年の治療を経て妊娠に至ったGは妊娠できたことを「やっと普通の合格ラインみたいな」と語っている。

自己の核の位置は、EとHを除いて新婚時代とほとんど変わっていない。EとHは枠の左下から中心になった。

#### (3) 妊娠後期

妊娠後期になると胎動は激しくなり、子どもが現実味をもって感じられるようになる。妊娠初期には漠然としていた出産や子どもに対するイメージも、後期になると医療機関や妊娠出産関連の図書から知識を得て、具体的なものになっていく。この時期多くの母親が感じているのは、子どもの障害に対する不安である(D: 障害を持っていたらどうしよう C, D, F, H: 五体満足で産まれてくるか心配)。また、出産の不安もある(A: ちゃんとできるんだろうか E: 双子だから陣痛も2倍と言われた)。その一方で、子どもへの希望も膨らんでいく。出産後の子どもとの生活を想像したり、自分の夢を託したりする。この時期の母親の心の中には子どもに早く会い

たい気持ちと無事でなかった時の恐怖が背中合わせで存在している。

#### (4) 子どもが産まれた時

特徴は産まれた喜びと子どもへの愛である。喜びは無事に産まれて良かったという思いも当然あるが、出産の興奮も含まれているように感じる（A：人間が一人産まれるってすごいこと）。子どもに会えた喜びと出産をやり遂げた誇らしさが「産まれた！」と言葉で表されている。対照的なのが帝王切開で出産したEである。「産んだという感じはない。いつの間にか外に出ている感じで寂しい」と語る。産まれた子どもへの反応は、出産の興奮に反して冷静な所もある（C：想像上の方がかわいかった E：ちょっと怖い H：わ！顔が舅そっくり）。しかし、すぐに子どもへの愛に取って代わられる（B：メロメロになってしまった C：自分の中心、上に来るぐらい F：うれしくてかわいくて）。こうした子どもへの思いをGは「かわいくないのに感情とは別ルートで、本能の部分で大事にする生物学的な愛を感じた」と語る。

#### (5) まとめ

山口（1997）は、母親の発達について子どもを産むことを出発点としているが、今回の図式から女性は妊娠を告げられたその時から母親になることを意識し、母親として生きていることがわかった。子どもと接する機会を持たない女性の子どもイメージは「赤ちゃんかわいい」といった漠然としたもので、具体的な育児についての知識はほとんどなかった。しかし、妊娠を知ったその時から自分の体内に存在する生命を意識し愛しむようになる。胎動を感じるようになると、愛情は一層深まり、それは「無事に産まれて欲しい」「どんなことがあっても育てる」という強い思いになる（B：自分は死んでもこの子達は残れるみたいなことも考えたりしていた C：健康じゃなく産まれてもそれはもう絶対育てようってね、どんな検査で結果が出ても）。そして、まだ見ぬ子どもへの愛が、辛く危険の伴う出産に女性を立ち向かわせるように感じた。

女性は母親になるまでに多くの関門をくぐり抜けている。愛する男性と一緒になれたこと、妊娠できたこと、そして、苦しいお産に耐えて五体満足の子どもを出産したこと。こうした経験が女性に母親としての自信や誇りを与えている。自由を奪い、多くの困難をもたらす育児を多くの女性が成し遂げてきたのは、こうした母親の自信や自負という精神的根幹があるからではないかと考える。

虐待による子どもの死亡事件は後を絶たない。虐待防止のため行政機関も育児相談等の取り組みを行っているが、相談件数は年々増加する傾向にある。幼児虐待や育児不安といった問題には母親の自信や自負の獲得に関わる部分があるように感じられる。母親が自らの感覚や体験から母親としての自信を得られるような取り組みが必要と考える。

#### 弔辞

共同研究者の稲越孝雄先生（文教大学名誉教授）が平成21年11月15日ご逝去されました。先生には長年にわたってご指導をいただきました。先生の寛容で自由な精神と暖かいお人柄に触れることができたことに感謝するとともに、先生のご冥福を心よりお祈りいたします。（小林麻子）

## 引用文献

- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦 (2009). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (1) —原家族に対して— 文教大学生生活科学研究, 31, 285-294.
- 小林麻子・稲越孝雄・会沢信彦 (2010). 図式的投影法を用いた母親の家族認識 (2) —青年期の家族関係— 文教大学生生活科学研究, 32, 99-108.
- 水島恵一 (1979). 「体験と意識」研究の方法論 体験と意識に関する総合研究第1集, 1-8.
- 山口雅史 (1997). いつ、一人前の母親になるのか? —母親のもつ母親発達観の研究— 家族心理学研究, 11, 83-75.
- Winnicott, D. W. (1964). *The Child, the Family, and the Outside World Part One: Mother and Child*. Harmondsworth, Middlesex, England: Penguin Books. (ウィニコット D.W. 猪股丈二 (訳) (1985). 子どもと家族とまわりの世界 (上) 赤ちゃんはなぜなくの —ウィニコット博士の育児講義— 星和書店)